

明恵『金獅子光顯鈔』について

若 園 善 聡

浄土宗西山禅林寺派総本山永観堂禅林寺の禅林図書館（京都市左京区）に、明恵（一二七三～一二三二）『金獅子光顯鈔』

の鎌倉時代の古写本がある。既にこの禅林寺本については京都府教育委員会より昭和五十三年三月に発行された『京都府古文書等緊急調査報告書浄土宗西山派三本山古文書目録』、またこれ以前に稲垣真哲『禅林寺所蔵典籍目録』に紹介している。しかしこれら目録自体の存在が希薄なためか、この禅林寺本は、ほとんど知られていないようである。現行の刊本は、禅林寺本と比較すると、多くの誤字・脱字が見受けられる。筆者は禅林図書館のご高配を得て閲覧・撮影を行う機会に恵まれたので改めて報告する。そして別に明恵研究の一視点を挙げてみたい。

（金獅子光顯鈔 粘葉装 押界あり 二巻二冊 二十三、六
輝×十五、三輝）

上巻 内題「金獅子章光顯鈔卷上」（墨付九十三丁）

下巻 内題「金獅子章光顯鈔卷下」（墨付九十丁）

奥書「永仁元（一二九三）年九月十五日書写校点畢」

「本云 承元四（一二二〇）年七月五日夜丑剋雖憚愚昧依長房卿託難背於紀州崎山草庵持念習字之余暇抄之 花嚴宗沙門高升生年三十八歳」

「建暦元（一二二一）年十月二十日夜子剋於深草堂廊拳誦授長房入道了」

「建長元（一二四九）年己酉十二月六日於高山寺關伽井房自大恵房手伝得之了并清」

この下巻の奥書によると、禅林寺本は明恵歿後六十一年目に書写されたことがわかる。続いて、周知のように三十八歳で承元四年に長房のために書き上げたことが載っている。さらに続いて、深草堂において長房に対して読み授け終つたのが、建暦元年の十月二十日とある。この後、建長元年十二月六日高山寺關伽井房（十無尽院）において、大恵房の手によって、喜海（義林房一一七四～一二五〇）の弟子の并清（恵日房一二二四～一二八三）によって伝得したことが知られる。換言すると、承元四年に書かれた二ヶ月後、長房は出家した。明

恵は請われた文献の解釈書をただ渡すのではなく、一年以上の間、親しく読み授けたことが知られる。このほば一年後の建暦二年十一月に『摧邪輪』を著すことになる。続いて、十無尽院第二世喜海七六歳の時、第三世となる二十六歳の弁清が大恵房の手によって伝得した。禅林寺本は十無尽院関係の大師によって受け継がれた系統本を書写したことを示すものといえる。

鎌倉古写本たる禅林寺本が、現在まで相続されてきたことは、自明であるが条件にたまたま恵まれて残ったという貴重なものである。これは条件に恵まれなければ湮滅することを意味する。つまり現在我々がみている文献はその大師の思想全体の限られた条件の中をみていることになる。また、総じて思想の発現は能弁・訥弁等のその大師の能力、またその取り巻く環境により、当然異なることは自明である。これらは現在の学者の思想と考えるようにいかなければ当然であることを意味している。明恵は撰述にあたり、自らはもちろん弟子に聞書させるという方法により文献を残し、また、成忍、俊賢、兼康^④という画家を用いて絵画も残した。こうしてみると明恵の思想は文献はもちろん絵画にも顯れてくるのではないだろうか。この点に関して成忍が画いたといわれる「明恵上人樹上坐禅像」で気付いたことがある。この絵画は、明恵自筆といわれる「高山寺楞伽山中 繩床樹定心石 擬凡僧座禅

之影 写愚形安禅堂壁 禅念沙門高弁」の讃のある繩床樹で坐禅入観する上人^⑤で宋画の影響^⑥等が指摘されている。繩床樹定心石での坐禅入観について、『仮名行状』に「元仁元（二二二四）年冬、楞伽山ノ峰に蟄居ス、其間ノ記録別ニアリ、余事ヲトメテ偏ニ座禅入観ヲ勤トス。座禅思惟の間ニ阿弥陀如来ヲ見奉ル、（中略）彼池ノ瑞魚カヨイ来リテアソフヘシト覺ユ云々、好相の体アラハナリ、（中略）殊ニ籠居座禅ノ間タナリ、定テ不思議勝境ノ相アル歟、委シクコレヲシラス、繩床樹定心石等の遺跡ノ記別ニアリ^⑦」とあり、『漢文行状』に「元仁元年冬、蟄居楞伽山峰、専止余事、偏勤坐禅入観、上人語云、坐禅思惟之間、夢常奉見阿弥陀如来光明来照、此妙觀察智三摩地、為禅門主故也（中略）其間不思議靈相不能委記^⑧」とある。つまり『仮名行状』では元仁元年の冬に繩床樹定心石での坐禅入観による奇瑞があり、この間の記録は別にあるというように相當な感動があつたと察せられる。また『漢文行状』の該当部分では、坐禅思惟の間に阿弥陀如来の光明来照をみられた。この不思議な靈相はくわしく記せないとする。この部分を坐禅像に当てはめてみると、明恵は坐禅入観によるこの不思議な靈相をみたときの状態を画いたとはいえないか。その意図するところは、自らの経験による坐禅入観による利益を示し、弟子や在俗の者へ奨励し鼓舞することではなかったか。明恵がわざわざ禅堂に安置したのも、阿

弥陀仏の来迎を常にみられた記事から推察できるように、法然の念仏思想への対抗が働いていたと考えられまいか。

明恵が坐禅入観による霊相をくわしく記すことができないとしていることは重要である。これは、文字だけでは実践による経験を示すことができないことを示している。こういった意味で絵画を仏教研究の立場から読めないかと考えて、あえて愚考と呈するものである。

- 1 慈心房寛真俗名藤原長房の紹介は、奥田勲『明恵―遍歴と夢―』一八〇頁、一九七八・十一、東京大学出版会
- 2 『梵網菩薩戒本疏』の奥書に名がみえる。田中久夫『義林房喜海の生涯』（『鎌倉仏教雑考』六一三頁、一九八二・二、思文閣）
- 3 喜海については、『前掲』『義林房喜海の生涯』（『鎌倉仏教雑考』五八一頁）
- 4 石田尚豊「明恵上人をめぐる華嚴変相図」（『明恵上人と高山寺』三一二頁、一九八一・五、同朋舎）
- 5 源豊宗「明恵上人の画像と其の筆者とに就いて」（『明恵上人と高山寺』二六四頁）中島博「明恵上人樹上坐禅像の主題」（『明恵上人と高山寺』二七二頁）奈良国立博物館『鎌倉仏教―高僧とその美術―』（図録一九二頁、一九九三・四）
- 6 伊藤大輔「高山寺像「明恵上人樹上坐禅像」考」（『美術史』一四〇、一九九六・三）今までの図像学的研究が前掲【石田】論文も含めて、注にまとめられている。
- 7 施無畏寺蔵「明恵上人行状記」下（『大日本史料』五之七、四〇

六〇四〇七頁、貞永元年正月十九日明恵寂の記事参照）『明資』一、五十七―五十八頁

8 高山寺蔵『高山寺明恵上人行状』下（『大日本史料』五之七、三八六―三八七頁）『明資』一、一三五―二〇六頁

（キーワード）明恵、『金獅子光頭鈔』、『明恵上山樹上坐像』（龍谷大学院修了）

新刊紹介

福田 亮成 著

空海思想の探求

A5判・三七二頁・定価一四、〇〇〇円

大蔵出版・二〇〇〇年三月